火 番 に つ い て

妙心寺本坊での火番と典座の研究 その1

THE NAME OF KOBAN

The study of koban and tenzo in Myoshinji main temple Part 1

平 井 俊 行*

Toshiyuki HIRAI

This paper examines the status, duties of the temple office known as koban based upon study of historical documents related to the Rinzai Zen monastery Myoshinji. From these materials, it is evident that the office of Koban existed at Myoshunji prior to 1831 and was filled by a monk jointly appointed as comptroller (Kansu) within the monastery's Eastern Rank (Toban). The duties of the koban included the supervision of meals accompanying religious services as well as the management of everyday articles and utensils used within the monastery. In conclusion, decide on a situation of Koban-Ryou.

Key Words: Edo Period, Zen Sect, Myoshinji Temple, Priest's Living Quarters, Eastern Rank (Toban), Koban

江戸時代 禅宗 妙心寺 庫裏 東班 火番

1. 研究の目的

火番（こば・こばん）について『広辞苑』では、

〔仏〕 禅家で火を管理する役僧。禅寺の下男。
と書かれている。

また建築史の立場からも川上貢氏が大徳寺の塔頭庫裏の検討の中で¹⁾、火番を竈の火をたきつけ、院内外の雑用に使役される者と述べられている。

このように火番は、竈の火の管理やその他の雑用に従事する役と考えられており、一般的に庫裏庭の竈焚口向かい側の転ばし根太上に床を張った程度の部屋があてられている。

しかし、臨済宗妙心寺本坊に関する古文書の中で、火番は僧侶の職の一つであり、行事の齋全体を統括し、同決算書の作成、日常は什器管理等の仕事を行う、寺院運営に係る重要な職として扱われている。

これにより、今までと異なる位置に火番の部屋（火番寮）が比定できるなど、歴史的に禅院の組織を検討することは、禅宗庫裏建築の研究の上で重要であると考えられる。

図1 真珠庵庫裏の修理前略平面図
室名は『禅院の建築』による

* 京都府教育庁指導部文化財保護課・工修

Cultural Properties Division, Kyoto Prefectural Board of Education,
M.Eng

本論文では、近世の妙心寺本坊における火番について、その身分・職務内容を明らかとし、庫裏内での火番寮の位置につき検討を行う。

2. 火番の身分

妙心寺の古文書の中で火番は、天文2年(1533)に作成された『妙心寺祠堂方米銭納下帳』²⁾に初めて登場し、それ以降の同種の文書に散見できる。

また納下帳以外の古文書では、享保19年(1734)頃に書写された『副寺寮須知』³⁾・延享元年(1744)に作られた『副寺交代之図』⁴⁾(図2)に火番の名称が確認できる。

しかし、これらの史料は、火番の身分を示すものとはなっていない。そこで火番の身分を示す史料を2つ取上げる。本山古文書『記録』⁵⁾の宝暦8年(1758)11月3日の条に、下記のようにある。

同披露ニ云リ力者善右衛門儀奉 勅之節備出シソロ
輦卑坊子近頃於 大庫裏 支度仕ソロ然処監寺サマ
方ヨリ先格無 之儀故重テハ支度ノ儀無用ニ可 仕
旨被 仰ソロ乍 然其節ハ私儀モ御用多ク御座ソロ
故私宅ニ居不 申旁以於 常住様 何卒支度被 為
ニ 仰付 被 下ソロ様ニ行者方 願出ソロトナリ
依 之副寺ヨリ火番方 相尋ソロ處支度致サセソロ
儀ハ先格無 之ソロ然處先達テハ差掛リ相願ソロニ
付無 據差許ソロ乍 然支度為 致ソロテハ何角差
支等多ク有 之ソロ間御無用可 被 成トナリ

後略 (下線著者・レは返り点)

この文は、副寺より妙心寺山内のことを決定する衆議に掛けられた質問内容である(以後の引用文中の「同披露」はすべて同じである)。妙心寺の住持となる人が入寺の儀式の際の勅使来寺の節、輦卑坊子を力者⁶⁾か火番方のどちらが雇うものかを協議した文である。

図2 『記録』延享元年7月19日の副寺交代の図

これにより、力者^{ろくしや}が監寺^{かんす}サマ方、副寺^{ふし}が火番方と称した人物は同じで、身分の下の方は監寺様方と呼び、上の方は火番方と称していることがわかる。

この監寺と火番方が同一人物であることは、同古文書の天保2年(1831)11月26日の条に明確に記述されている。

衆議ニ開山忌ノ節火番方良監寺昨今掛塔ニテ不案内
殊 病氣 付出勤難相成故行者良全エ出勤申付ソロ
先例無之ソロヘ共何角骨折故爲心附金壹顆差遣シ可
然尤開山忌結算帳 記載ノ旨副寺エ申入 後略⁷⁾

(下線著者)

このように火番(方)とは、監寺という身分の僧侶に限定された職名であることがわかる。

本来監寺とは、僧侶を東・西両班に分けた時、寺院の経営にあたる東班に属し、一切の寺務を監督する都寺の補佐をする職名であった。しかし近世の妙心寺では、『正法山出世位階等法式略記』⁸⁾に以下のようにある。

一 東班立与申者凡十歳之頃剃髮仕候得者先ッ十三
四歳迄無職ニ而罷在十五六歳ニ至リ沙弥ニ任シ
二十歳之頃上座ニ任シ三十歳以上ニ而監寺ニ任
シ五十歳以上ニ而都寺職ニ任シ申候

右東班之者都寺迄ニ昇進仕候勿論伝法相統
者不能成候 後略

これによると火番を勤める監寺とは、伝法相統を許されない⁹⁾東班僧侶の僧階として用いられ、30歳から50歳ぐらいの人であることがわかる。

3. 火番方の職務内容

次に職務内容を検討する。『記録』の宝暦元年(1751)9月19日の条には、

同披露ニ云監寺方ヨリ申上ソロハ再住之節 勅使
供奉ノ侍分只今迄ハ方丈裏間ニ於テ喫齋有之ソロヘ
共近年裡間モ殊ノ外差支ソロ間小方丈ニ 於テ 喫齋有
之様 致度經營ハ常住ノ支度ノ内ヨリ分 遣 可申
ソロ同供奉ノ下部小食並 齋共 勅使宿坊ニ給サセ申
度ソロトナリ

一 方丈裡間結縁ノ齋諸山ノ衆ハ格別近年殊ノ外濫
リニ成リ ソロ間諸山ノ 外ハ新命寮ヨリ断リ ノ札ニテ
モ 持参ソロ様 被遊如何御座ソロ哉トナリ

一 大庫裡只今迄湯釜一口ヲ入院開山忌共 不勝手
ニ 御座ソロ間大走り 之外 塗リ 上テ致シ 湯釜一
口新造 致シ度ソロトナリ 後略

とあり、監寺方より再住之節¹⁰⁾の勅使供奉ノ侍分の接客場所を方丈裏間から小方丈に変更すること(図3の解説参照)、結縁の齋は諸山の他は新命寮(新住持方)より断りの札を持参してはどうかということ、もう1点は、入院・開山忌の節、大庫裏の湯釜が1口しかなく、不便であるため増設したいことの3点を願出ている。

図3 天保15年(1844)奉行所提出の伽藍絵図(部分)

図4 宝暦9年(1759)頃の妙心寺庫裏略平面図

- * 図3の一点鎖線(著者記入)より東側の小方丈を中心とする一角は、妙心寺住持が居住する場所であり、住持の管理である。
他方一点鎖線より西側が、副寺の管理となる。
(注12参考)
- * 『記録』の宝暦元年9月19日の条の方丈裏間と裡間とは、いずれも大方丈(六間取り平面)の北側3室(計72畳)のことである。(現存:重要文化財)
- * 腕蔵は、大庫裡の南西にある桁行5間・梁行2間半の土蔵の内、享保16年(1731)の建立当初は、北側2間分であり、南側3間分は諸証文蔵として用いた。
しかし、『副寺内渡牒』では、腕蔵と諸証文蔵(庫前北土蔵)が入替っている。宝暦12年(1762)～文化5年(1808)の間の変化である。(現存)
- * その他の建物名(注12参照)
方丈土蔵:大方丈西側の土蔵(現存しない)
評席土蔵:図3の副寺寮の北側の土蔵
(現存・寛永2年(1625)の棟札あり)
廊 梁:同上副寺寮と評席土蔵の間の廊下(現存)
北之小屋:図3の最も北の長屋(現存)

すなわち監寺（火番）は、行事の時の接客場所や炊事施設の補充を副寺を通して四派執事と協議を行っていることがわかる¹¹⁾。

また宝暦4年(1754)10月3日の条には、

同披露云、腕蔵二階之入口正中、有之甚不勝手。ソロ間御付直、被下ソロ様火番方ヨリ申ソロト也

衆議、勝手悪敷ソロハ、付直シ可然ト也

とあり、火番方より腕蔵の階段が中央にあり不便なので付替えを願出ており、腕蔵の管理者であることがわかる。

さらに、文政3年(1820)7月17日の条では、

副寺披露云、火番方ヨリ申出ソロ法事腕貳百四拾人前、殊外相損ソロ故塗替被仰付ソロ様申出ソロ尤晩炊腕六拾人前相足参百人前、都合致シ、晩炊腕新調、被仰付ソロハ、都合宜御座ソロ段申出ソロト也

衆議、追テ可及相談ト也

とあり、火番が法事腕の塗替えと晩炊腕の補充を願出ていることから、什器類の管理をしていることがわかる。

そして、『規式須知』¹²⁾によって毎年7月晦日の副寺交代の節、同職が管理する建物・物品が新副寺に引渡されたことが確認できる。

腕蔵については、

前略 受テ 取リ 方ノ 火番食堂ニ 出テ 坐ス 東面如圖

至レハ腕蔵ニ 答ッ 有ト 後略

とあり、火番は引渡しが行われる食堂に入り、腕蔵の管理者として物品の確認を行っていたことがわかる（図2参照）。

火番が管理していた腕蔵に保管されていた物品は、『副寺内渡牒』¹³⁾の「腕蔵」の項目に列挙されており、48品目・3082点の什器類が確認できる。

さらにこの什器類は、寛永6年(1629)8月12日の壁書で¹⁴⁾ 損料を決めており、火番の重要な職に、副寺の下で塔頭への什器類の貸出しが行われていたことがわかる。

以上の史料その他の『記録』内の記述により作製したものが火番方年表である。（表1）

これにより火番方の職務内容が次のようであったことが明らかとなる。

1. 入寺・開山忌等行事の時
 - A. 接客場所の指定（執事・副寺と事前協議）
 - B. 炊事設備の拡充
 - C. 什器類の取扱い方の指導（監視）
 - D. 料理内容の検討
 - E. 齋の決算書の提出
 - F. 扶持人¹⁵⁾・歩役¹⁶⁾の指導・監督
2. 日常
 - G. 腕蔵の管理
 - H. 腕蔵内の什器類の管理と拡充
 - I. 什器類の塔頭への貸出し
 - J. 年貢・地子米の収納

すなわち妙心寺本坊での火番の職務は、行事の時の齋全体を統括し、日常は什器類の管理等を行う、寺院運営上の重要な職であることが明らかとなった。

このことは、一般的に禅宗寺院で僧侶の食事を掌る職は典座であり、什器類の管理を行う職は直歳¹⁷⁾と呼ばれていると考えられていることが、近世の妙心寺では、両職名は存在せず典座の職に直歳の職務の一部を取込んで、火番と呼ばれていたことが判明した。

4. 火番寮の位置

妙心寺の火番は、伝法相統を許されない東班僧侶の監寺が勤め、本山の行事の齋を総括し、日常は腕蔵内の什器の管理、さらに塔頭への貸出しを行う、寺院運営に係わる重要な職であることが確認できた。

これにより火番寮の位置は、一般的な禅宗寺院で典座寮と呼ばれる部屋をあてるべきであると考ええる。

身分・職務内容以外に火番寮の位置を決める要素としては、下記の点が上げられる。

1. 副寺の指揮下で職務を行うことより副寺寮と近接している必要があること
2. 米銭納下帳の米の下行状況より火番は1名であること
3. 万治元年(1658)の『正法山妙心禅寺米銭納下帳』の9月の下行分に「六匁九分 火番寮并小者部屋之用 疊表六帖」とあり、六帖未満の畳敷きの部屋であると考えられること
4. 文化4年(1807)12月11日の夜九ッ時（午前0時）に大庫裏で発生した火事を最初に発見したのは火番であることより、庫裏内に居室があったと考えられること。

以上により、日常の炊事を行う小庫裏の東にあり、食堂等の部屋と同じ床高さをもち、畳を敷詰め、棹縁天井を張った四畳の部屋をあてるべきと考える（図4参照）。

また、開口部は現在西面を引違いの板戸としているが北側半間を片引き戸、南半間を板壁に復原できる。

北面は土壁、東面は胴縁の見える板壁であり、南面2間は現在格子を入れ、室内側にそれぞれ引違いの障子を立込む窓となっているが、柱に板溝・胴縁の痕跡があることより、やはり室内に胴縁を見せる板壁に復原できる。

この様な西面・南面の改造時期は限定できないが、現在の庫裏が建立された承応2年(1653)の時期は3方壁で窓のない、閉鎖的な部屋であったことがわかる。

しかしこの部屋は、大庫裏・小庫裏等の炊事施設や副寺寮に隣接し、庫裏の南西には腕蔵が存在するなど行事・日常の職務を行う上でまさに要の位置にある。

表1 妙心寺火番方年表 1 (天保2年まで)

[職務内容は、本文中のアルファベットを表す。また出典記載のないものは『記録』による]

年 号	月 日	職務内容	記 述 内 容
天文 2年(1533)		—	『妙心寺祠堂方米銭納下帳』に火番の記述あり。(初見)
寛永 6年(1629)	8 12	I	「常住什物損料之定」ができる。(壁書)
慶安 元年(1648)	6	—	月分須知の看板を新調する。(壇越の命日を記す)
寛文 8年(1668)	9 4	—	東班立を廃止する。(壁書)
	12 2	—	本山持庵付寮舎(四派本庵の監寺寮のことか?)の監寺衆の弟子は、西班・東班どちらの取立てでもよいこととする。(壁書)
元禄 5年(1692)	2 26	—	寛文8年12月2日の壁書の再確認を行う。(壁書)
享保19年(1734)		D・H	『副寺寮須知』内に火番の記述あり。
		J	『副寺寮須知』附副寺寮書式の年貢・地子米の「皆済案文」に火番印とあり。
延享 元年(1744)	7 19	G	『副寺交代の図』を作成する。(食堂内に火番が見える)
宝暦 元年(1751)	9 19	A・B	監寺方より再住の節の喫斎について相談あり。また入院・開山忌の節の大庫裡の湯釜が1口で不便なので大走りの外に湯釜を設けたいと相談あり。
	10 8	B	上記の大庫裡湯釜の場所を確認し、井戸の北に仮竈を築くこととする。
宝暦 4年(1754)	10 3	G	火番方より碗蔵の中央にある2階入口を付替たいと申出、許可される。
宝暦 8年(1758)	11 3	F	力者より頼卑坊子を本山で雇って欲しいと願出る。(監寺=火番)
宝暦12年(1762)	7 25	G	火番方より碗蔵と諸証文蔵を入替るように願出るが、見合せる。
安永 元年(1772)	12 1	C	入院・開山忌の節、法事碗を大切に扱うよう火番方より申付けよう伝える。
安永 2年(1773)	4 20	D・E	開山忌常住辨(本山が決算)の書付を下す。また火番方へ頭付を渡す。
安永 4年(1775)	10 22	C・F	開山忌常住辨の不備を火番方に聞合わせ定書を作る。(7箇条の文あり)
安永 5年(1776)	10 6	D	火番方より開山忌の齋の汁を前のように織大根にしたいと届出、許可される。
天明 4年(1784)	4 20	G	『規式須知』9冊が完成する。(副寺交代の様子が確認できる)
寛政 3年(1791)	11 17	B	火番方より開山忌の中盛を小庫裏から廊下にし、置囲炉裏2個を新調したいと願出、許可される。
享和 2年(1802)	11 29	D	鑄鐘延引につき火番方より是迄準備した物のことについて伺う。
文化 2年(1805)	7 22	H	火番方より入院の節法事碗を損じたので繕い代を受取ったが、今度塗替につき、銀子を本山に上納したいと届ける。
	7 22	H	火番方より法事碗塗替のところ、塗師が勘違いをしていたので値段を引下げ、銀子を本山に上納したと届ける。
文化 4年(1807)	12 13	—	11日夜九ッ時大庫裏にて小火あり火番方が見付、門前の者が消火にあたる。そこで門前の者に心付を遣わす。
文政 3年(1820)	4 10	H	火番方より大庫裡に用いる大火掻を新調してほしいと願出、許可される。
	7 17	H	火番方より法事碗 240人分の塗替と60人分の追加、晩炊碗の新調を願出る。保留
	9 10	H	上の件につき衆議を行い、晩炊碗の新調は行わず、法事碗の塗替は年50碗ずつ行うこととする。
天保 2年(1831)	11 26	—	開山忌の節火番方良監寺が病氣につき行者に代役をさせる。(火番方良監寺)

5. 結論

これまでの禅院の研究では、東班僧侶に都寺・監寺・副寺・維那・典座・直歳の六知事と呼ばれる職が存在していると考えられていたが、近世の天保12年(1841)以前の妙心寺での六知事の状況は、都寺・監寺が東班僧侶の身分を示し、本来の寺の運営を掌る職名とはなっていない。

また副寺は、延宝6年(1678)にそれまで納所と呼んでいた職名を改めたものであり、金銭・穀類の出納から建物・物品の管理まで行う職であるが、『記録』により西班僧侶の前堂(座元)が勤めていることが確認できる。

さらに衆僧の進退や諸仏事祈祷等の配役を決める維那も延宝元年(1673)11月2日の壁書により後堂(首座)と呼ばれる西班僧侶の職であることが明記されている¹⁸⁾。

しかし僧侶の食事を掌る典座と一歳(年)の幹事である直歳の職名は、妙心寺には存在せず、典座と直歳の職の一部を合せ持った火番と呼ばれる職務が形成されていたことが判明した。

これらはいずれも今日まで考えられていた身分・職務内容と異なるものとなっていた。

その上で火番寮は、庫裏内の大庫裏・小庫裏・副寺寮に近接する四帖の部屋をあてるべきであると結論づけた。

最後に火番について『禅林象器箋』¹⁹⁾に、

火伴。忠日、司竈火之伴類也。世ニ作ル火番ニ 謬レリ

矣。

と書かれており、(中国の古典にないため)火番の字を用いるのは誤りであると述べられているが、日本で独自の発展をした言葉であると考えられる。

これらの例が示す様に禅寺全体の身分制度・職務内容には、中国より輸入されたもののほか日本で発展したもの、各禅宗寺院内で独自の発展をした部分があり、これまでの禅寺の組織を東班と西班の僧侶に分ける固定的な考え方では、特に近世の建築を考察する上で限界があると考えられる。

本論文では妙心寺本坊の組織を歴史的に捕える中で火番寮の位置の検討を行った。

今後、妙心寺山内の塔頭庫裏内の室名・職名の検討や他の禅宗寺院での組織を個別に調査することが、禅宗建築を考察する上で不可欠であるが、これらの点については、今後の課題としたい。

謝 辞

本研究を進める中で、宗教法人妙心寺の法務部・塔頭雑華院・同春浦院等に史料閲覧の便宜を計って頂いた。記して感謝の意を表します。

注

- 1) 川上貢：『禅院の建築』, P167, 河原書店 昭和43年
- 2) 『妙心寺祠堂方米銭納下帳』; 妙心寺での米による出納が記述されている。天文2年(1533)の文書が最も古いものである。
その8月分と9月分下行には「微笑侍真并小番」「納所 小番」と記述されているが
10月分の下行以降は、「壹斗七升四合 微笑侍真并火番」・「壹斗一升六合 納所并火番」と「火番」が用いられている。
- 3) 副寺とは、妙心寺で本山の金・銀・銭並びに穀類すべての出納を管理するほか、本山建物・物品の総管理責任者である。任期は1年であった。
火番は、副寺に統括され、職務上の質問内容は同職に尋ねられた。副寺で決められない内容は、四派執事(注11参照)の行う衆議に掛けられ決定されていた。
『副寺寮須知』; 副寺勤務の手引書である。月分・毎月・臨時・瑞世・収納・支行・制法の7項目につき記述されている。また附として書記寮書式副寺寮書式が記載されている。
[享保19年頃の写本; 妙心寺塔頭雑華院所蔵]
具体的には『副寺寮須知』の月分の内、
12月1日に開山忌の餞色を四派火番が取ること。
7月24日に明日椀揃の儀があることを力者より四派火番に触れること。
副寺寮書式の年貢・地子米の皆済案文に火番が押印する書式が記載されている。以上3ヶ所
- 4) 『副寺交代之図』; 延享元年(1744)に作製された副寺交代の節の食堂の道具飾りと渡方見廻の衆の位置関係を示す図。[妙心寺本坊所蔵]
同図は後年(年代不明)紙を張り、座席等の変更を行っているため、図2では『記録』の延享元年7月19日の記述内の図を用いた。
同様の図は、『規式須知』第9冊「圖繪」にも存在する(注12参照)。
- 5) 『記録』; 延宝6年(1678)1月～慶応4年(1868)1月[元治元年分欠]までの毎日の本山での出来事を記す。[妙心寺本坊所蔵]
- 6) 妙心寺で住持の駕籠をかついだ俗人であり、常時3人が雇われ、年長の者を兄部と称していた。
- 7) 掛塔とは、禅寺の本坊または塔頭内の寮に籍を置くことである。本文の場合は、本坊の火番寮に籍を置いたこと。
行者とは、中世より幕末まで代々妙心寺に仕えた法衣帯刀の事務僧である。2赤沢家・伊地知家・繁田家の4家があり、剃髪と同時に本山出勤が認

められた。本山内外の雑務に従事していた。

- 8) 妙心寺慈雲院寄託蔵書 [花園大学保管]
 9) 寺蔵文書『記録』の約 190年分の記述の内、東班より西班への転班は、追贈という形で許可されていない(安永3年(1774)5月17日の条)。

また西班より東班への転班は、1例のみ確認できる(文化7年(1810)10月10日の条)。

以上本質的には、10歳前後に禅寺に入った時点で、寺院の経営にあたる東班僧侶か、修行を司る西班僧侶かに分けられ、生涯その身分は変化しなかった。

- 10) 妙心寺の住持とは、近世以降、当寺を開いた関山慧元の伝法を継承する名誉職となり、本山運営上の決定権はなかった。1年交代であり、入寺・再住とは住持となる人が、本山に入る儀式である。
 11) 四派執事とは、妙心寺境内のある4塔頭(東海庵・龍泉庵・靈雲院・聖沢院)を四派と称し、それぞれの派から本山の寺務の決済を行うために選ばれた代表である。妙心寺の末寺はすべてこの四派に属している。
 12) 『規式須知』;天明4年(1784)に作製された本山での行事の手順をまとめた手引書。「住持章」2冊・「両序章」2冊・「五侍者章」2冊・「大衆章」2冊・「圖繪」1冊の計9冊である。副寺交代の儀式については、「大衆章」(下巻)の7月晦日に記述がある。

[写本を妙心寺塔頭春浦院所蔵]

副寺交代の節の引渡しの順番を列举する。

1. 諸帳面・鑰の受渡し (古副寺→新副寺)
2. 食堂金像観音大士像の確認 (新・古副寺)
3. 方丈・方丈土蔵・點心寮・章駄天堂・食堂・評席土蔵・廊架・方丈北の土蔵・評席・副寺寮の物品確認 (新副寺の随徒)
4. 椀蔵の物品確認 (受取方の火番)
5. 方丈土蔵中の諸道具の内、行者方にある物品確認 (行者)
6. 大廊架・大庫司・小庫司・南門・北門・材木小屋の物品確認 (力者の兄部)

図3・図4参照のこと

- 13) 『副寺内渡牒』;製作年代不明(但し文書内の建物より明和6年(1769)から文化5年(1808)までの製作と考えられる)、7月晦日の副寺交代の前、25日に副寺管理の諸道具の確認を行う時に用いる台帳である。 [妙心寺本坊所蔵]

総鑰箱・土蔵の廊架・章駄天堂・方丈・方丈土蔵・點心寮・方丈北土蔵・椀蔵・庫前北土蔵・北之小屋の物品の確認を行う。

椀蔵には、朱椀 780人前・燕椀 200人前・折敷

620人前等、48品目・3082点の什器類が保管されていた。

- 14) 『壁書歴年便覧』一 [妙心寺本坊所蔵]
 常住什物損料之定

一 椀	壹具 付五文目
一 折敷	壹束 付貳文目
一 玳瑁臺	拾箇 付参文目
一 縁高	拾箇 付貳文目
一 飯重箱	壹重 付貳文目
一 菓子臺	貳枚 付壹文目
一 曲盆	貳枚 付壹文目

右悉逐點檢有破損之物者加修補可被請取
 若於不念者當納所急度可被辨焉此外屏風
 紅氈已下者諸役者被相届可有借與者也
 仍衆評如件

寛永六己巳年八月十二日

壁書とは、妙心寺内の法令である。この壁書は、妙心寺において天正・慶長につぎ、3番目に古いものであり、本寺における什器類の貸出しがいか

に重要なことであったかがわかる。
 同じ内容の文は、『副寺寮須知』(注3参照)の収納の項にもあり、近世を通して貸出しが行われていることがわかる。

- 15) 本山が常時雇っていた俗人9人の総称、力者3人・南門守2人・北門守2人・司鐘1人・方丈掃除1人のことである。本山の雑務に従事していた。
 16) 歩役とは、入院・開山忌の節、雑用係として妙心寺三門前の者に掛けられた役である。

『副寺寮須知』の支行の項に、

一 門前、歩役年中從一軒 五人充出也飯米、者壹人黒米壹升充五分之和市也

とあり、年間1軒に5人役であったことがわかる。

(安永4年(1775)の段階で南門前38軒、北門前48軒、西門前21軒があった。『史料 京都の歴史』14 右京区)

- 17) 1歳(年)の幹事に当たる職、具体的には一切の作務を掌る職で、殿堂・寮舎の修理、什器の点検、田園荘舎の管理を行う。

- 18) 『法山壁書分類 二』

一 當山之紀綱向後爲後堂衆之職分從品麗之上首籍次半年充可被相勸然則交代者可爲正月十六日七月十六日但爲六箇月之衣料可令下行銀貳百錢事

延寶改元癸丑十一月二日定

- 19) 『禅林象器箋』とは、妙心寺 314世の無著道忠により寛保元年(1741)に著された禅院に関する総合的な研究書である。

(1994年5月10日原稿受理, 1994年10月31日採用決定)